

コンゴ伝道に見る異文化接触 [34]

1975年4月、コンゴブラザビル出張所が設置された。それはノソング・アルフォンス氏がコンゴブラザビル教会長に任命されたのと同時であった。本教で初の黒人会長が誕生したとはいえ、「憩の家」診療所の活動など、教会におけるさまざまな活動には日本人の役割が重要だった。ことに、ノソング氏を会長に推挙するに当たっては反対意見も多く、会長として適任かどうかが問われていたこともあり、日本人が引き続きコンゴに常駐することが必要不可欠でもあった。そこで考えられたのが海外部の出先機関である出張所の設置である。見方を変えるなら、コンゴブラザビル出張所の設置は新たな日本人布教師の常駐の方便でもあった。

実態、コンゴブラザビル出張所は他の出張所と比較して特殊なものだったと言えよう。例えば、出張所を示す看板は一つもなかった。また通常、所内にはお社が置かれ、鳴り物が揃えられて、朝夕や月次祭のおつとめが勤められるのだが、このコンゴブラザビル出張所にはそうしたものは一切なかった。所員は教会に参拝することになっていた。もっとも、これは考えてみれば必然的なことでもある。なぜなら新たに出張所が設置されたからと言っても、建物が新しくなったわけでもなく、日本人が会長を務めていた時に使われていた、教会の敷地内にある日本人教職舎に「出張所」という冠をつけただけだったからである。

したがってノソング氏が、そこが「出張所」になったということをもし十分理解できなかったとしても、それは致し方ないことだったとも言えよう。彼にとっては、物理的には何ら変わっていないのである。しかも、出張所の所長には3代会長を務めた高井猶久氏がそのままスライドした形で着任したからなおさらであっただろう。しかし、現実的には教会長が現地人になり、それをサポートする出張所が設置されたことは、本教のコンゴ伝道における大きな展開であり、これまでと異なる布教体制になることを意味していた。表面的な変化がない中で、ノソング会長はその変化に対応できないまま、少なくとも納得いかないまま、その後のコンゴ伝道は進められていく。ノソング氏とはそれ以前からも、教会での活動の中で日本人布教師とさまざまな問題があった上に、「教会 vs. 出張所」という新たな緊張関係が加わったことになる。

出張所の設置によって生じる現実的な変化は、教会における日本人の立場に現れる。例えば、これまで「教会青年」として会長の下で動いていた日本人布教師たちは、同時に「出張所員」という立場に変わり、会長ではなく所長の下に置かれるようになる。日本人が所長（工藤誠悦氏、谷徹也氏、菅沼洋氏）を務めたルカク布教所でも、会長就任の前年にコンゴ人（ムアング・マチウ氏）が所長になっている。また、会長就任と同年に開設されたポワント・ノワール布教所には、コンゴ人（キブカ・フィリップ氏）が所長に任命された。つまり、組織的に見ればコンゴ人の「長」の配下には日本人は誰もいないのである。日本人の「上」に立って、教会を仕切っていくということを思い描いていたノソング会長にとって、この状況は期待はずれだったかもしれない。さらに、出張所と教会の会計ははっきりと分けられ、会長は教会の会計報告を、出張所を通じて海外部に提出す

ることになった。一方、出張所の会計は会長には決して知られることはない。

つまりノソング氏としては、会長になったとはいえ、自身にすべての権限が与えられたのではなく、それどころか日本人布教師とは一線が引かれることになったのである。そうした意味で、会長や教会の活動をサポートするという出張所の存在は、彼にとっては何とも腹立たしい存在だったのではないだろうか。彼のそうした思いは海外部との話し合いの席でよく聞かれた「所長と会長のどちらが上なのか?」「日本人はどうして教服を着て朝夕のおつとめに奉仕しないのか?」「コンゴに派遣される日本人やその交代に関して、どうして会長の裁量ではないのか?」といった発言にも感じられる。

その一方で、ノソング氏は、日本人が不要であるとは決して思っていなかった。むしろ、コンゴの教会における日本人布教師の必要性をだれよりも感じていた人かもしれない。ただ、その日本人は自身の支配下に置きたかったのだろう。折しも、コンゴ社会では当時、さまざまな機関で白人からコンゴ人に権限が委譲される時期でもあり、「黒人の下で白人が仕事する」ことが、長年白人に支配され、命令され、従属しなければならなかった黒人にとって、大変大きな意味を持っていたとも考えられる。「コンゴに天理教を持ってきたのは私である」「私はアフリカで最初の天理教の信者である」という自負の念が強かった彼にとって、また植民地時代からタクシー運転手として、白人の案内をする機会が多かった彼にとって、そうした思いはより一層強かったのではないだろうか。

出張所開所の1年後には、2代所長として高橋茂男氏が着任（1976年4月）した。その3年後には、3代所長として堀内和蔵氏が着任（1979年4月）する。それぞれに、家族や若い日本人布教師を所員として伴っての出向であった。1977年12月に「憩の家」診療所を閉鎖して以降は、それまでの日本人が教会活動をリードしていた時代と比較して、第一線には立つことはなく、教会活動の後方的な支援に徹した時代でもあった。「何もできなくても、ここにいることに意味がある」そんな雰囲気の中、出張所と教会が微妙な関係を保ちつつコンゴ布教は進められていく。それでもやはり、教会における日本人の存在意義は大きく、近隣の人たちやコンゴ社会に対して、コンゴブラザビル教会が日本の天理教教会本部に認知された正式な教会であることの証しであり、またノソング会長の正当性を保証するものでもあった。

1984年8月に3代所長が任期を終えた後、さまざまな事情から約2年間は所長不在のまま所員家族だけがコンゴに滞在する。そして1986年6月、出張所がまた新たな体制となる。それは所長をあえて任命しない形で日本人が派遣されたことだ。「所長」と「会長」というコンゴ教会内における二人の「chef(長)」の存在を避けるための苦肉の策でもあった。すでに教会青年として日本人会長時代にコンゴを経験している濱田道仁氏（現ハワイ伝道庁長）が、家族と二人の所員を伴ってコンゴに赴任した。ただ、それが1963年から25年間続いたコンゴにおける日本人の常駐の最後になることを、その時点ではだれも予想していなかった。